

Title	中世ドイツの書簡にみる女性神秘家への司牧と「役割転換」の一事例： ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンとマルガレータ・エーブナー
Sub Title	Der „Rollentausch“ von Beichtvater und Mystikerin in einem mittelalterlichen Briefwechsel： Heinrich von Nördlingen und Margaretha Ebner
Author	片山, 由有子(Katayama, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.128, (2025. 6) ,p.123 (38)- 137 (24)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01280001-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世ドイツの書簡にみる女性神秘家への司牧と「役割転換」の一事例

—— ハイน์リヒ・フォン・ネルトリンゲンとマルガレータ・エープナー ——

片山由有子

中高ドイツ語の往復書簡

ドイツ語で書かれた現存する最古の往復書簡は14世紀前半に書かれたもので、ハイน์リヒ・フォン・ネルトリンゲンという在俗聖職者と、ドミニコ会修道院マリア・メーディングエンの修道女マルガレータ・エープナー（ca.1291-1351）の間で交わされたものとされている¹。このやりとりは、二人が出会った1332年頃からマルガレータが亡くなった1351年まで20年ほどにわたって続いている。そこには、アヴィニヨン教皇庁と神聖ローマ帝国皇帝との不仲、それによる政治的混乱、そしてペストを背景とした出来事が描かれており、激動の時代の歴史的な資料でもある。とはいえ、当然のことながら、彼らはそれぞれの近況報告のためだけにやりとりをしていたわけではない。その根底にある目的は「司牧（cura monialium）」であった。

中世キリスト教社会においては、グレゴリウス改革以後、教皇を頂点とする位階制が作り上げられていた。その際、俗人は教会から締め出され、神の教えを伝えるのは聖職者に限られるようになる。聖職者はすべて男性だったから、女性はその地位に関係なく、キリスト教会内において常に男性に指導されるべき存在であった。中世ヨーロッパにおける女性への司牧は、従って、男性が女性を導くという基本構造を持っており、ここで扱うハイน์リヒとマルガレータの関係もこのコンテクスト上にある。ハイน์リヒはマルガレータの宗教生活・霊的生活に助言を与える存在だった。しかし本論で注目したいのは、書簡という個人的な伝達ツールに彼らの「別の」関係性を垣間見ることにはできないかということである。というのも、上記の枠組みからは、師と教え子の関係、一種の上下関係が想像され

うる。事実、高度な神学知識を身につける機会を持ち得なかった女性たちは、神の教えに興味を持てば持つほど「教えられる」必要があっただろう。しかし、実際の人間関係は個別の関わりと境遇のなかで育まれるものであり、社会に要請されたジェンダーロールに基づかないこともある。この時代の書簡は、現代で交わされるものと異なり、完全に私的なものではない。周囲の人がそれを読むことは当然であった。しかし一方で、不特定多数のあらゆる人に読まれることを想定しているものでもない。本論では、教会によって求められ、そのようなものとして表現されざるを得ない関係性を「超えたもの」が、この14世紀の古い書簡にどのように見出されるかを扱っていきたい。なお、この考察に際し、書簡の底本としては、Philipp Strauchによる校訂版を用いる²。また後述するマルガレータ・エーブナーの『啓示』も同様である。

ドミニコ会による女性への司牧とマルガレータ・エーブナー

ハインリヒとマルガレータの関係を書簡から検討するにあたって、この時代のキリスト教世界における女性への司牧について概略したい。

中世後期の13世紀、西欧キリスト教世界において女子修道院の数は飛躍的に増加した。これは宗教的な関心が大きく高まっていた時代であり、教会の教義から逸脱した「異端」が教会の大きな脅威となっていたことと関係する。正統ではない教義に触れてそこに帰依する女性たちも多かったことから、教会は、信仰心の高まった女性たちが異端や異端グループに取り込まれないよう、女性たちを教会の指導下に置くことにする。すなわち、修道会に従属する女子修道院を増設し、そこに組み込ませるようにしたのである。このような女性への司牧にはさまざまな修道会が取り組んだが、異端制圧を目的に創設された托鉢修道会であるドミニコ会はとりわけ大きな役割を担った。

ここでの手紙の受け取り手であり書き手であるマルガレータ・エーブナーもこのような要請のなかで創設されたドミニコ会女子修道院の修道女である。一方のハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは、マルガレータの司牧に力を注ぎ、20年にもわたって彼女の霊的生活を支え、マルガレータに「真の神の友」と繰り返し呼ばれる人物であるが、ドミニコ会士ではなかった。マルガレータは自身の宗教生活を記したテキスト（『啓示』）を残しているが、そこで彼との出会いを次の

ように記している。

そのあとの聖ナルチススの日、神は彼の真の友人〔ハインリヒ〕を私たちの修道院へと送って下さったのです。人々は私にそこ〔彼のところ〕に行くように求めました。私は嫌でした。なぜならまだ誰のところにも行っておらず、交流も持っていなかったのですから。しかしそこへ行くと、私は真の教えをとててもよろこんで聞きました³。

ハインリヒは神に「送られてきた」存在として現れる。つまり修道院にやってくる人物なのである。次に彼が話題になるときも同様である。

真実においてこう言えます、神は真実の光のなかで、愛する天使を私に送ったのだと。彼〔ハインリヒ〕が来たと人が私に言ったとき、私はたくさんの涙をこぼしながら祭壇へと行ったのです。そのあと私は彼のところに行きました。（中略）そして神はお計らい下さり、終課のあいだ〔私が彼の〕そばにすることを、彼は私に薦めてくれたのです。私は幸せでした。彼は神によって天から私に送られたとしか思えませんでした⁴。

マルガレータは彼の来訪を涙ながらに喜んだという。この1334年10月末のエピソードは次の記述につながって終わる。

諸聖人の祝日になって、時間が過ぎ、そして私たちの主の最も信頼する友人〔ハインリヒ〕が私から去り、別れたとき、私はなお一層本当の喜びのなかで毎日生活していました。その喜びは私には明らかなことでした。私は嘆きも泣きもしませんでした。何故なら、神はひとりの大変力強い教師と共に私を守っていたと、そう思えたからです⁵。

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは、司牧のために修道院を訪問し、数日もしないうちに帰っていく人物なのである。ドミニコ会修道院になぜわざわざドミニコ会士ではない聖職者が来たのか。これは、当時喫緊の課題とされた女性への司牧をめぐるドミニコ会士の反発が関係している。

教皇庁は13世紀の前半から女性の宗教的共同体の制度化と修道院への帰属を要求していたが、托鉢修道会であるドミニコ会が教皇庁に課された女性への司牧の義務を最終的に受け入れたのは1257年のことである⁶。はじめは肯定的な姿勢をとっていた修道士たちであったが、過大な要求のために大きな負担を強いられることになり、やがてこの義務に抵抗を見せるようになっていた。修道会と教皇庁の駆け引きのすえ、教皇庁は1246年4月の勅書において、広範囲に及ぶ司牧の内容を霊的な指導「のみ」に削減した⁷。つまり、ドミニコ会は、女性への司牧の範囲を縮小するという妥協でもってそれを受け入れたのである。教皇庁からの厳しい要請によって1250年までにはドイツ管轄において少なくとも21の女子修道院がドミニコ会に属していたが、上記の理由から、ドミニコ会士たちによる懇切丁寧な女性の指導というのは常に見込めるものではなかった。実際にドミニコ会女子修道院における司牧には「ばらつき」があったようなのである。それについて Martina Wehrli-Johns は、都市チューリヒにある修道院と、そうではない郊外の、辺鄙な場所にあった女子修道院との司牧の差を説明する。例えば後者の代表として挙げられるテス修道院 (Kloster Töss) において、確かに彼女たちはチューリヒのドミニコ会の司牧を受けていたが、その司牧の内容や濃さは前者のものとは異なっていたという⁸。Susanne Bürkle はテス修道院においてははじめから連続的に在俗聖職者が叙任司祭として斡旋されていたということを踏まえ、このテス修道院は決してドミニコ会女子修道院における例外ではなく、田舎の女子修道院での定期的な司牧は多くの場合において周辺出身の在俗聖職者に任せられていたとし、それに当てはまる修道院としてザンクト・カタリーネンタール修道院 (Kloster St. Katharinental)、キルヒベルク修道院 (Kloster Kirchberg)、ヴァイル修道院 (Kloster Weil)、エンゲルタール修道院 (Kloster Engelthal)、そしてマリア・メーディングゲン修道院 (Kloster Maria Medingen) を挙げている⁹。本論で扱っているマルガレータ・エーブナーはまさにこのマリア・メーディングゲン修道院に暮らしていた修道女であった。つまりマルガレータとハインリヒの二人は、都市から離れたドミニコ会女子修道院に住む修道女と、司牧の任務ためにそこに送られた在俗聖職者であって、ハインリヒがマルガレータの修道院を訪れたときには直接の語り合いから信仰と霊的生活の相談と助言がなされ、そうでないときには書簡でやりとりをしたのである。

ハインリヒの半生とマルガレータ・エーブナー

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンの故郷であり、その活動の拠点となったのは、その名の示す通り、ドイツ南部の都市ネルトリンゲンである。しかし生まれた時期をはじめ、書簡に残されている以前のこと、すなわち1332年頃にマリア・メーディングゲン修道院を訪れるより前のことに関してはほとんど知られていない。ハインリヒがマルガレータに宛てたいくつかの書簡から、この時期には彼はいくつかの女子修道院で女性への司牧活動を行なっていたことが分かる。

ハインリヒがマリア・メーディングゲン修道院を訪問し、マルガレータとはじめて出会ったとき、彼女は心身ともに衰弱した状態だった。マルガレータはその少し前に心から信頼していたお付きの修道女を失っていたのである。マルガレータは1312年、二十歳を過ぎた頃に病気に倒れ、死ぬかもしれないと思われた日々を3年間苦しみ、その後も体調の悪い状態は13年ものあいだ続いたという。この病気をきっかけに人間関係のはかなさに気づいたマルガレータは神のみに心を向けた霊的生活を送るようになっていたが、それでもなお、このお付きの修道女の存在だけはマルガレータの心の拠り所であり続けたらしい。そのような女性を病で亡くし、マルガレータは一層みじめに（ellend）生きることを誓うものの、喪失感から泣き暮らしていた。彼女がハインリヒに出会い、彼の言葉によって救われたのは、そのようなときのことである。

すでに見たように、ハインリヒは女子修道院に司牧に行き、そしてまもなく去っていく人物であった。二人は直接の訪問と、書簡のやりとりで交流を続けていた。そして出会いから数年後、ハインリヒは特別な動きを見せる。アヴィニオン教皇庁への訪問である。彼は1335年頃に故郷を出立し、約二年間不在にする。マルガレータはこのときのことを次のように書いている。

さて、神のご意志によって、キリスト教の混乱のために、彼は私から取られてしまいました。私にはもはや何の人間的な慰めもなく、私は再び、人生の大きなみじめさにあったのです¹⁰。

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは不在期間を経て再び故郷に帰ってくるが、彼がアヴィニオン教皇庁を訪れる人物だったということ、つまり教皇への忠

誠心を持っていたということは、彼のこの後の人生に大きな影響を与えるようになる。それというのも、ハインリヒとマルガレータが交流を持ち始めた1330年代、ときの教皇はヨハネス22世であり、二人の住む南ドイツを支配していたのはバイエルン公ルートヴィヒ4世であった。つまり、壮絶な仲違いをした二人が教会と世俗のトップに君臨していたのである。教皇ヨハネス22世はルートヴィヒを神聖ローマ帝国皇帝として認めないばかりか、1324年にはこれを破門にし、さらに彼の支配する地域では教会の聖務がすべて禁止されるという聖務禁止令が出された。一方のルートヴィヒは、ヨハネス22世が異端としたフランシスコ会の聖霊派の修道士たちの逃げ場となり、また彼自身も1328年にヨハネス22世の廃位を宣言して対立教皇を擁立するのである。そのルートヴィヒは1338年8月、フランクフルト帝国会議で次の旨を宣告する。すなわち、ヨハネス22世による聖餐停止と聖務禁止は遵守されてはならず、これらは執り行われなければならない、これに従わない者は平和喪失に処されるとしたのである。平和喪失とは共同体からの追放を意味し、誰かの助けを得ることもできないという厳しいものであった。

このことはハインリヒにとってあまりに大きな衝撃だったに違いない。この前年の1337年に故郷に帰ってきたと推定されるハインリヒは、1338年7月にはネルトリンゲン近郊のカイスハイム修道院に属するフェッセンハイム教区司祭着任の話がまとまりかけていた状態だった¹¹。しかし翌8月に交付された上記の法律のため、故郷における落ち着いた生活は叶わなくなり、それどころか同年末から亡命生活を送ることになるのである。

ちなみにこのハインリヒを奈落の底に落としたルートヴィヒのこの決定に関して、マルガレータ・エーブナーのほうはハインリヒを失う以外の大きな打撃は被っていない。都市貴族出身のマルガレータは根っからの親皇帝派だったのである。

この亡命においてハインリヒが行き着いたのは教皇による聖務禁止令が守られていたバーゼルである。そこにはハインリヒと同じ理由で逃れてきていた神学者のヨハネス・タウラー（ca.1300-1361）がいた。ハインリヒはタウラーの便宜で救護院に宿を得、またそこで司牧活動を行えるようになり、バーゼルでの生活を軌道に乗せることに成功する。また、この時期のバーゼルには神の友というグループがあった。神の友というのは敬虔なキリスト教信徒の集まりであるが、それとしての規律を持ち、あるいは組織化されたような集団ではなく、ただ神へと

向かい合うことを目指していた聖俗両方の人々の集まりである。タウラーはここに大きく関わっていたことで知られているが、ハインリヒもこのグループと親交を持つようになる。バーゼルを拠点とする彼の生活は10年ほど続いた。このバーゼル滞在中、ハインリヒは旅に出ることもあった。マルガレータとの交流は基本的には書簡を通じてなされていたが、亡命生活のあいだ、少なくとも4回は彼女のいるマリア・メーディングゲン修道院を訪れたことが知られている。ハインリヒが母親と共にバーゼルを去ったのは1348年あるいは1349年のことと推定される。いくつかの土地を経て、1350年、彼はようやく故郷ネルトリンゲンに戻ってくるが、そのときのネルトリンゲンにはペストが蔓延していた。それから間もない1351年6月にはマルガレータ・エーブナーが亡くなってしまう。ハインリヒはエンゲルタール修道院の修道女クリスティーネ・エーブナーを同年秋に訪ね、彼女にも大きな靈感を与えたようであるが、三週間ほどそこに滞在のちの彼の確かな消息は不明であり、彼の没年も不明である。

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは、文学研究において、ドイツ語圏で書かれた現存する最古の往復書簡の書き手としてではなく、マルガレータ・エーブナーの霊的指導者として名前が挙げられることが多い。マルガレータは中世後期のドイツ語圏の女性神秘家として知られ、カトリック教会に列福されている。その彼女の聖性を後世に伝えてきたのは本論ですでに引用した『啓示』と呼ばれるテキストで、マルガレータが神から受け取ったという恩寵とその経験が記されており、一種の自伝ともいえる。一人称 (ich) で書かれ、1312年に彼女が病に倒れた時点から1348年まで、概ね時間軸に沿って書き進められていることから、日記のような性質を持っている。ところがこれは実際には1312年から記されたものではなく、1344年になってようやく執筆が開始されたテキストなのである。何故、どのようにしてこのテキストが成立したのか。ここにはハインリヒが関わっている。マルガレータは自身の執筆について『啓示』に次のように記している。

また、神の真実の友人、彼は神が大きな慰めのために私の全人生に与えた人なのですが、彼に、神が私に与えるものを書くよう頼まれました。彼自身がその書き手であれば、と思ったのですが、それはできないようです。そして彼は言いました、神が私に与えるというものを書き記しはじめるようにと。

それは私には難しいことで、嫌々はじめようとなりました¹²。

この執筆はハインリヒからの要請によるものだという。ただし忘れてはならないのは、「聴罪司祭からの要請・命令による執筆」はこの時代の女性の宗教的なテキストにあらわれる典型的なトポスだということである。マルガレータの生きた14世紀は女性たちが自由に神の教えに関することを書き、主張してよい時代ではなかった。やむにやまれぬ執筆であり、正当性がある（とみなされる）ことは必要であり、女性たちは一種の聖人伝的な枠組みにおさまるように執筆したのである。その枠組みを構成するいくつかのトポスのうちの一つがこの「要請あるいは命令による執筆」である。女性の個々の執筆事例において本当に聖職者たちからの執筆要請があったかどうか、扱うのは非常に難しい。しかしマルガレータとハインリヒのケースは例外である。往復書簡が残っており、実際にハインリヒが書簡内でこれを「要請」しているからだ。マルガレータが執筆を始めたのは1344年の待降節であるが、その直前の10月にハインリヒは次のように記している。

それではお元気で、神の子よ。私に書いて〔送って〕くださいね。とりわけ、私が今あなたとしているような愛と痛みに満ちた別れのこと、そして私がお願いした〔あなたの〕変化についても¹³。(書簡39)

翌年2月には、マルガレータはすでにこれを書き始めていたのだが、ハインリヒは重ねて執筆を依頼している。

すでにあなたに頼んだように、神があなたにおいてなした変化を、我々に神の意志において描写してくださることを求めます。そして神が私たちによりたくさんのものを、あなたを通してお与えになりますように。我々にそれを断念させませんように。私たちには、神における愛しい子、エリスベト・シェーパッハという、誠実な助け手であり、筆記者がいるのですから¹⁴。(書簡40)

ハインリヒのこの度重なる要請が記されたのは、彼のパーゼル亡命中である。これへの説明となりうる背景は大きく二点ある。一つは、彼がこの時期パーゼル

で神の友という敬虔なキリスト教徒のグループと親交を持っていたことである。現存する中高ドイツ語でのメヒティルト・フォン・マクデブルク¹⁵の『神性の流れる光』は14世紀に制作されたもので、元の所有者はマルガレーテ・ツム・ゴルドネンリングという女性であったが、彼女はバーゼルの神の友のメンバーであり、ハインリヒとも親しい人物だった。つまりハインリヒはテキストによって神秘的な教説を学びうる人々のコミュニティと関わっていたのである。もう一つは、まさにこのメヒティルトの神秘的著作の翻訳者の一人がハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンであったということである。翻訳というのは、メヒティルトのテキストは低地ドイツ語で書かれており、南ドイツでこれが読まれるには高地ドイツ語への書き換えが必要だったためである。この作業にハインリヒは関わっていた。彼は1345年の書簡のなかでマルガレータとマリア・メーディングゲン修道院の修道女たちに次のように書いている。

私はあなたがたに、『神性の光 (Das liecht der gothait)』という本をお送りします。熱いキリストの愛の光が、私をこれに向かわせました。これは私がドイツ語で読んだなかで最も魅惑的なドイツ語であり、心の最も深いところを動かした愛の一撃だったのですから。〔……〕あなたたちが理解できない文言は記して私に〔手紙に〕書いてください。そうしたらあなたたちに分かりやすいドイツ語にしましょう。我々に全く馴染みのないドイツ語で書かれていたので、少し私たちのドイツ語にするのに、労を惜しまずおよそ二年取り組んだのです¹⁶。(書簡43)

メヒティルトによる中低ドイツ語の『神性の流れる光』は現在では失われてしまっていて、我々が知りうる中世のメヒティルトのテキストはハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンが関わったこの中高ドイツ語のものしかない。メヒティルトの著作は文学的にも卓越しており、そのようなテキストを後世につないだという点においてもハインリヒの功績は大きい。しかし彼のこの功績もまた司牧に基づくものである。神の恩寵をテキストから学び得る裕福な市民が神の友にいたがゆえに、このようなテキストには需要があった。そして『神性の流れる光』を中高ドイツ語に訳にしたのと同じ共同体的要請のなかで、ハインリヒはマルガレータにその恩寵経験を書くことを求めたのである。

ハインリヒの書簡にあらわれる「役割の逆転」

靈的指導者が女性へ宛てた14世紀の手紙として伝わっているのは、ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンのものだけではない。ハインリヒ・ゾイゼ(ca.1295-1366)も同様のものを異なった形式で残している。ハインリヒ・ゾイゼはハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンの友人でありドミニコ会士である。ヨハネス・タウラーと同様、この時代の重要なキリスト教神学者・神秘思想家として知られており、ゾイゼの思想はとりわけ「範典(Exemplar)」と呼ばれる書物にまとめられている。「範典」はゾイゼ自身が編集したもので、『ゾイゼの生涯』『永遠の知恵の書』『真理の書』『小書簡集』という四つの書物から成っていて、『小書簡集』には彼の指導する女性に宛てたものが含まれている¹⁷。この書は次の文言から始まっている。

『小書簡集』が、ここに始まる

ここに述べられる教えは、永遠の知恵のしもべが、その靈的娘並びに他の靈の子供たちに送った、通常の手紙の中から選ばれたものです¹⁸。

この冒頭に明確に書かれているように、『小書簡集』は自らの書簡を用い、かつ書簡の形式をとった「教え」である。ここに収められている第八の手紙は「神に在る喜びに包まれた、敬虔な人間が採るべき振舞い エルスベト・シュターゲルへ」という副題を持ち、まずエルスベトが彼に相談してきた内容が記される。

わが子よ、このことを、あなたが伝えてきた便りに応えて、わたしは、はっきりとあなたに言うことができます。手紙の中であなたは、慈しみ深い永遠の知恵への、偽りなき、強く求める熱い愛に煽られて、情熱の炎が燃え上がっている、と書いています。さらに、新しい光と、その情熱の炎が、あなたの中に惹き起こした、あなたには未知の、不可思議な出来事についても語り、その時あなたの心は、甘い痛みを覚え、また、言葉で表しえない、全身が快く溶け去る思いと、心が限りなく高まり行く感覚に包まれたことを知らせています。その上であなたは、そうした状態の中で、永遠の知恵に対して、この上ない愛の深さを示すにはどうすればよいか、また、あなたの中に

生じた、不可思議な現象にはどう対処すべきか、わたしの指示を求めています。¹⁹

どうやらエルスベトは神に関わる特別な経験を持ち、ゾイゼにそれを報告すると同時に助言を仰いだようである。これに対し、ゾイゼは彼女に起こったことを喜びながらも次のように諭す。

ですから、この状況でのあなたは、自分自身の喜びに思いを巡らすのではなく、神の御心に目を注ぐことを心掛けなさい。そのことに不安を抱く必要はありません。すべては、神の御心に基づいており、神が、あなたの魂の中で、心を込めた愛の誘いをされているのです。それは紛れもないことで、それが、神の定めなのです。しかしあなたは、肉体の力を消耗しすぎるのではないよう、身体への配慮を蔑ろにしてはいけません。あなたの進むべき道を歩き続けるならば、歩みを始めたばかりの者に賜わる、あの寵愛は、あなたからもかなり取り去られ、その代わりに、あなたは、もっと高い段階に導かれることも起こりうるのです²⁰。

ゾイゼはエルスベトの神への感覚を喜ばしいこととし、肯定的な言葉を記すが、決して過度ではなく、むしろ諫めさえもする。彼が『小書簡集』に採用したエルスベト宛ての書簡はいずれもこのような姿勢が基調となっており、ゾイゼは威厳を持った彼女の「師」として現れている。

一方ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンがマルガレータに宛てた書簡は、同じく神からの恩寵経験を得たマルガレータへの助言を扱っていながら、これと様相を異にする。例えば1334年のものと推察される書簡は、次のように書きはじめられている。

主イエス・キリストにおいてわたしの最も愛する、そして忠実な者に、わたし、その卑しく相応しからぬ友人が、わたしたちの愛する主イエス・キリストの力強い復活のすべての果実を、聖霊における平穏と喜びを持たんことをお祈り申し上げます——イエス、マリア、そして愛する十二使徒の魂が受け取ったように²¹。(書簡11)

彼は書簡の冒頭の挨拶で、マルガレータに敬意を表するのみならず、自らを「卑しく相応しからぬ友人 (ir armer unwirdiger freund)」と、殊更に低く描写するのである。このマルガレータに対するハインリヒの態度について、Urban Federerはすでにこの言葉選びからして、「宛先の女性と手紙の書き手の関係性における対等でない状態²²」が発生していると述べる。ゾイゼが『小書簡集』に示した彼とその女生徒とのものとは全く異なる関係性がここに見て取れるのである。

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは司牧者として霊的指導のためにマリア・メーディングゲン修道院を訪れ、マルガレータと交流を持つようになった。マルガレータは神から遣わされた人物としてハインリヒを慕い、教えを求める。『啓示』にはハインリヒがそばにいてくれることへの渴望が繰り返し記されているが、マルガレータは実際にそれを彼に言明していたようである。しかし彼は、マルガレータが「あなたに焦がれております」と伝えたことに驚いたとし、先に挙げた書簡内で次のように論ずるのである。

わたしは、あなたの求めが理解できます、何よりも愛しいあなたが、小さきわたしに持つ（その求め）を。わたしがいないことよりも、わたしの弱さがそれを引き起こすのですから²³。

ハインリヒは、マルガレータがハインリヒの不在を辛く思うのは、彼がそこにはいないからではないと説く。マルガレータは神に選ばれ、貧しく弱いものを神へと導く存在であって、ハインリヒ自身がそのような弱い存在であるからこそ彼女は彼を求めてしまうのだ、というのである。これは謙遜ともいえるかもしれない。彼はマルガレータへの感銘を重ねて示すが、その際多くの書簡で上記の引用のように自らを「相応しくない(unwirdig)」という形容詞と共に描写しており、それは確かにマルガレータへの賛辞を際立たせる機能を果たしている。ところが彼の書簡におけるこの「神を知るマルガレータ」と「相応しくない自分」という対比はただのレトリックではなく、通奏低音のように書簡全体に貫かれており、彼が抱える大きな感情と共に噴き出されることさえある。1346年、ハインリヒは次のように書いている。

何故なら、あなたが言うような、神がわたしを通してあなたや他の神の共たちに与えている神の恩寵を、〔わたし自身が〕知らないということを、告白せねばならないのです。だからわたしは、わたしの心臓の内なる味覚が神の愛しい作用に対してかくも鈍感であることを適切に畏れねばなりません。ああ、苦しい！（書簡48）²⁴

ハインリヒは、神を語り、信徒を導く身でありながら、彼自身は神の恩寵を感じることができないと嘆くのである。そして彼とは対照的に、神の恩寵を絶え間なく感じ、語るマルガレータに、神からの助けへのとりなしを乞い願う。上記の書簡は次のように続く。

わたしはわたしなりに健康で、何も嘆くことはないのです、わたし自身についてを除けば。無秩序な労苦に満ち、たくさんの苦悩が押し入るわたしの奇妙な人生によって、たくさんの心身の病気を引き起こしています。神の力によって耐えることを助けてください。あなたの同封した手紙とナイフを、ケルンにいる神において誠実なひとに送りました。わたしはまたケルンからの連絡にとっても悲しんでいて、それはまだ毎日続いています。おお、苦しい！わたしの悲しみに溢れた人生に、あなたの純粋な飲み物を注ぎ込んでください²⁵。

ハインリヒの書簡のなかで、マルガレータは教師として現れているわけではない。しかしマルガレータは明らかに、男性の聖職者のみが独占し得た神の恩寵を仲介する役割を奪還することに成功しているのである。

結尾

ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンとマルガレータ・エーブナーの関係をみるにあたって、ハインリヒがマルガレータに宛てた書簡の中から、司牧者としての態度が逸脱している箇所をいくつか取り上げた。ハインリヒの書簡におけるマルガレータに対する手放しの感嘆、自己卑下、そして痛切な嘆きは、自ら編集し

て他者に提示した、あの模範的なゾイゼの書簡には見られないものである。もちろん、生活に必要な用事やお願いも同時に記しているようなハインリヒの書簡と、神秘的著作として人の目に触れることを前提に書き上げたゾイゼの『小書簡集』を取り上げて、同種の書簡として比較することは実際には適切ではない。しかし、ゾイゼの『小書簡集』はその名が示す通り「範典 (Exemplar)」——手本であり、そこにあるのは神を求める女性に対する司牧者としての規範でもあるだろう。それとの比較によって、ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンの書簡の特異性はより明らかになる。

神の恩寵を報告する女性たちは中世後期に多く現れ、特殊な立場を持ち得た。それは教会に立場を持ちえなかった女性たちの権力行使の一つの形式でさえあった²⁶。この書簡は、マルガレータの『啓示』と合わせて、教会によって規定された社会的なヒエラルキーと秩序が、女性神秘家という異質な存在——彼女たちは教会組織の外側で神の声を語りうるのである——が介入する場合にどのように揺れ動くのかを示すドキュメントであるといえる。

一方で、当然のことながら、ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンの書簡から読み取れることを中世後期の司牧の実際として一般化することはできない。マルガレータにもハインリヒにもそれぞれの人生と、性格と、その個別の状況があり、この書簡は、どの手紙もそうであるように、彼らにしか経験しえなかったことの結晶に他ならないからである。しかし、そのような個別の状況で生まれた書簡、それも現存するドイツ語での最古の往復書簡が、中世後期の精神性を代表する神秘思想に関わるものであるということ、そしてそこに「聖職者側」の「感情の吐露」が現れていることは極めて興味深いことではないだろうか。社会の大きな流れ、ダイナミクスと、その中で必死に生きた一個人の外的・内的な世界の交差が、ここに見られるのである。

註

- 1 この二人の書簡は16世紀に制作されたとされる写本（大英博物館所蔵、MS Add. 11430）が今日に伝えられる最も古いものである。なお、残っているもののほとんどはハインリヒがマルガレータに宛てたもので、マルガレータによるものはわずか一通である。

- 2 Strauch, Philipp: Margaretha Ebner und Heinrich von Nördlingen. Ein Beitrag zur
Geschichte der deutschen Mystik. Freiburg i. B., Tübingen (J.C.B.Mohr) 1882.
- 3 Strauch: a.a.O., S. 16.
- 4 Ebd., S. 24.
- 5 Ebd., S. 25.
- 6 Bürkle, Susanne: Literatur im Kloster. Historische Funktion und rhetorische Legitimation
frauenmystischer Texte des 14. Jahrhunderts. Tübingen und Basel (Francke) 1999, S. 57.
- 7 Ebd., S. 73.
- 8 Wehrli-Johns, Martina: Geschichte des Zürcher Predigerkonvents (1230-1524). Mendikan-
tentum zwischen Kirche, Adel und Stadt. Zürich (Hans Rohr) 1980.
- 9 Bürkle: a.a.O., S. 94f.
- 10 Strauch: a.a.O., S. 45.
- 11 Ebd., S. XLII.
- 12 Strauch: a.a.O., S. 83f.
- 13 Ebd., S. 235f.
- 14 Ebd., S. 238.
- 15 メヒティルト・フォン・マクデブルク (ca.1207-1282) は13世紀ドイツの女性神秘
家である。元々ベギンとして暮らしていたが、晩年はヘルフタ修道院で過ごした。
- 16 Ebd., S. 246f.
- 17 この『小書簡集』は、現在「大書簡集」と呼ばれるもののなかからゾイゼ自身が
いくつかを選び、編集してまとめたものである。
- 18 ハインリヒ・ゾイゼ『永遠の知恵の書／真理の書／小書簡集』神谷完訳、創文社、
1998年、215頁。
- 19 同前、247頁以下。
- 20 同前、248頁以下。
- 21 Strauch: a.a.O., S. 184f.
- 22 Federer, Urban: Mystische Erfahrung im literarischen Dialog: Die Briefe Heinrichs von
Nördlingen an Margaretha Ebner. Berlin (De Gruyter) 2011, S. 59.
- 23 Ebd., S. 185.
- 24 Ebd., S. 257.
- 25 Ebd.
- 26 Vgl. Bynum, Caroline Walker: Fragmentierung und Erlösung: Geschlecht und Körper im
Glauben des Mittelalters. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1996, S. 160ff.